

---

# **死ぬまでは**

みうら しの

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

死ぬまでは

### 【Zコード】

N1760BA

### 【作者名】

みうら しの

### 【あらすじ】

クリスマスの日に起きた悲惨な一家心中。

その中で唯一生き残り、自分が母を殺したのだと自責の念に追いつめられ、自殺を図る17歳の少女、渡辺沙奈。

しかし、唯一無二の親友を目の前で失った少年、工藤竜也に出会い、生きる希望を見つける。

大切なものを守れなかつた2人が、悲しみを背負つてまで生きる意味。



地獄だった。

薄暗いリビングで、母が私へ包丁を向けた。頭の中はパニックを起こして、目の前の現実を受け入れられなかつた。ただ、外から帰ってきたばかりのかじかんだ手が震えた。

窓から差し込んだ青白い光と、テーブルの隅に寄せられた小さなクリスマス・ツリーの豆電球が、いつもより柔らかく室内を照らしだす。長い黒髪が邪魔をして、母の顔は見えなかつた。

「疲れちゃつた」

母の言葉には何の感情もこもつていない。ボソボソとした発音で、声色は深い闇に満ちていた。包丁の先端を私の喉元に向かたまま、母は近づいてくる。一歩ずつ、ゆっくりと。

「死にたいよ」

母の足元には、まだ4才になつたばかりの妹がうつ伏せに横たわっていた。素直で明るくて、とても優しい子だつた。大きくなつたら3人でディズニーランドに行こうね。そう言つていた私の可愛い可愛い妹。そして母の愛しい次女だつたはずだ。しかしあう、恐らく死んでいる。

「…………お母さん…………」

私がそう言つうが早いが、お母さんは悲鳴を上げて包丁を振り下ろした。咄嗟に身を引き、なんとか避けては、背中を丸めて頭を低くしながら台所へと逃げ込んだ。恐怖で足が言つ事を聞かない。半ば倒れるようにして冷蔵庫の陰へと隠れ、激しく震える肩をぎゅっと抱いていた。全てが夢であつてほしいと、血がにじむほど唇を噛んだ。

少しするとリビングから母のすすり泣く声が聞こえた。私の震えはふと止まり、恐る恐る全身の力を抜く。父が死んで以来、聞いた

事のなかつた母の泣く声に、全感覚を集中させた。

私はそつとりビングを覗いた。母はテーブルの上の小さなクリスマス・ツリーの前で座り込んでいた。包丁は床に置き、両手で顔を隠していた。弱々しく光を放つそれは、去年私と母が妹に買ったものだつた。ねじを回せばオルゴールにもなるそれを妹はすごく気に入つて、いつもジングル・ベルの曲をかけては一緒に歌つていた。

「お母さん……？」

私は母の隣にしゃがんで、背中をさすつた。母はこんなに瘦せていたのか。

「貧しくたつて、お父さんがいなくたつて、平氣だよ。生きていればなんとかなるよ、そうでしょう？お母さん……」

「優花はもう死んでしまつた。私が殺してしまつた。もう遅いわ、何もかも……」

母は呼吸を止めた。そしてゆっくりとこちらを向き、私を見つめた。瞳に光はなかつた。

その瞬間ときだつた 母は私の首を絞め、押し倒した。クリスマス・ツリーはテーブルから転げ落ち、私の顔の横でか弱くジングル・ベルを鳴らし始めた。

ツリーのむこう側に、妹の細い腕が見えた。血がついていた。その光景に吐き気がした。母がさらに強く力を込めると顔が熱くなり、目が飛び出しそうになり、全身の血管がドクドクと脈うつのがわかつた。

もう死ぬかもしれない。そう覚悟した。遠のく意識の中、私は必死にもがいた。そして指先に刃物が触れた。私は無我夢中でそれをつかみ、咄嗟に母に押しつけてしまつた。

さくつという生々しい感覚。包丁は簡単に母の内臓を突き破つた。母の腕の力はすつと抜けて、私は咳き込んだ。

生きか死かの選択だつた。私が、というよりも、母が生きるか、私が生きるかの。しかし咄嗟の判断とはいえ、取り返しのつかない現実を作つた瞬間だつた。昨日までの幸せな日常は、一度と戻らない。

母と妹と私の、三人の、幸せな時間。

目の前の夥しい量の血は私の制服を濡らした。夢ではなく、全て現実だ。逃げられない、背負わなくてはいけない、哀しい現実。母の腕の力はすっと抜けて、私は咳き込んだ。母は声も出さずに苦しいうな顔をして、私の上に倒れ込んだ。そして耳元でそつと囁くと、そのまま動かなくなつた。

途切れ途切れに鳴っていたジングル・ベルの音楽が、ふいに止まつた。

早く高校生を終えたい。高校生ってどうしてこう、キラキラ輝いているんだろう。何気ない毎日が至福のように、なんて幸福そうな顔をしているんだろう。みんなそれぞれ、小さな幸せとか小さな不幸せとかを寄せ集めて、継ぎ接ぎの宝物を持っている。この価値は自分にだけわかればいいと、胸を張っている。

私はそんな高校生でいることを疎ましく思っていた。太陽の日差しの中に、暗く重い陰を作ってしまう自分が嫌だった。誰かの輝きを邪魔をしたくなかった。消えたいと思つた回数は、指が何本あっても足りない。

一人で登校して、黙つて授業を受けて、一人でお弁当を食べて、一人で帰る。それが私の当たり前の日常だった。だつて、母を殺した私は、幸せになんかなれない。必要最低限のものだけを選択して、細々と生きていいくしかないのだ。

私は、母を殺した罪を償えなかつたのだ。法律は本当の意味で私を救つてはくれなかつた。「正当防衛」のたつた四文字が私を絶望させ、今もなお心の奥に残る大きな重りをぶら下げていつた。そして最も私を追い詰めたのは、周囲の同情だ。勝手に悲劇のヒロインに仕立て上げられ、可哀想だと囁かれた。この事件の中身を、誰もわかつていなかつた。私はたまらなくそれが嫌だつた。可哀想なのは私じゃない、家族に殺された母と妹だ。

私のことは父方の祖母が引き取つてくれた。父が死んでからほとんど関わりがなかつたから、まさかこの家に来るとは思わなかつた。でも、よく考えてみればそれしか手段はない。母方の祖母の大切な娘を殺したのは、私なのだから。

私は学校が終わると、いつも野球部の練習を眺めていた。父は中学校と野球部だったらしい。祖母がそう教えてくれてからは野球

に興味を持った。女の子だつた私も、昔はよく父とキャッチボールをしていた。うまくキャッチできたとき、二力つと笑う父が好きだつた。

ボールがミットにはまる音、バットの甲高い金属音、誰かの怒鳴り声、野球にかかるものは全部格好良いと思つた。迫る夏の大会に向けて一生懸命な姿、土煙の舞う中で汗を流す部員、白い練習着がドロドロになつていいく様、次々と内野を回る白球、いつまで見ても飽きなかつた。

私は時々そりやつて、野球部の練習が終わるまで見入つてゐることがあつた。終るのはいつも8時や9時だつた。今日も最後まで見てしまい、慌てて帰らうとしたとき、背後から声をかけられた。

「渡辺！」

振り返ると、真っ黒になつた顔にくしゃつと笑顔を浮かべた、同じクラスの館山恒樹たてやまじゅきだつた。

「館山くん……」

学校でろくに口を聞いた事がなかつたせいでのんな表情で何を言えばいいのかわからなかつた。館山の後ろにはひとつ上の先輩がニヤニヤと笑つていた。

「あ、あのお……な！」

館山は坊主頭をわしわしと搔いて難しそうな顔をした。そして突然思い切つたように叫んだ。

「俺お前のことが好きだ！」

「え！？」

あまりにも突然の告白に私は思わず口を大きくあけ、間抜けに館山を見上げた。

「その……なんつーか、無口なところも、運動音痴なところも、何気にすぐ頭いいところも、チビなところも、ほーっとしてるとこも、さりげなく優しい」とするところも、可愛いところも……全部好きだ。あんまり関わつたこともないしな、俺のことよくわからないと思うけど、これからお互いわかりあっていけねばなあ……なんつって。あつ、

今じゃなくていいいから、返事はいつでもいいから

「は、はあ……」

褒めているのか褒めていないのか良くわからない言葉の羅列に私は混乱した。とりあえず、彼が私を好いてくれているのだけはわかつたが、恋愛なんてしたことのない私はどうしたらいのかわからなかつた。

「そ、それじゃ、また明日教室でな」

一方的にそう言つと、館山は先輩と共に帰つて行つた。私はそこを暫し立ち去り、野球部員がいなくなつたころ、家路に就いた。

次の日の朝、教室に入つて、あと思つた。そつこねばこの間席替えをした時、館山の隣になつたのだった。今日は氣まずいからすつと窓の外を見ていよう。そう思いながら席に着く。館山も同じ気持ちなのか、大袈裟に私に背を向けていた。

今日は野球部の練習も見ないで帰ろう。昨日のように帰り際に出くわすなんて嫌だ。私は人を好きにはなれないし、好きになつてほしくもなかつたのに。

幸せに近づくといふことが怖かった。どうせ、いつか失つてしまふ傷いものなのだから。

久しぶりに放課後すぐに帰った。茶の間には祖父と祖母、それと母の妹がいた。母の妹は私の父のことを相当嫌つていて、父方の祖父と祖母に関わろうともしていなかつたのに、急にどうしたのだろう。それに3人ともかなり怒つた顔をしていて、私のことに気がついていないようだつた。

その光景を異様に思いながらも、部屋への階段を上がるうとした時だつた。

「何よ今更！勝手に上がりこんできたと思つたらそんな昔の話掘り出して」

「昔の話？何が昔の話なんですか！私たちにとつてはね、何年たつても昔のことだなんて割り切れないのよ！なおさらこんなことがあつたなら、許せない！」

ただならぬ怒声に、私はこいつそり言い合いの内容を聞いた。

「こんなことつて何よ！何もしてないじゃない！あなたの姉はね、勝手に死んだの…」

「よくそんなこと言えるわね！お姉ちゃんのこと、精神的に追い詰

めて殺したの、あなた達だつたんじゃない！」

「えつ……」

思わず声が出た。口からとこづつも、直接心から零れたよつて  
感じた。

「お母さんを心中に追いつめたの……おばあちゃんとおじちゃん  
なの……」

時が止まつたように、動けなくなつた。心臓がバクバクしてゐる  
がわかつた。

「ちょっと、人聞きの悪いこと言わないでよ。ビリしてあなたの姉  
を私たちが殺したことにするのよ。」

「お姉ちゃんの旦那が交通事故で亡くなつた時、一緒に乗つっていた  
お姉ちゃんが生き残つたから責めてたんでしょう？　あんたが死ねば  
よかつたのについて言ってたらしいじゃない！」

信じられなかつた。あの優しい祖父と祖母が、母にそんなことを  
言つてゐるとは思えなかつた。

「おいいい加減にしろ、帰つてくれ」

「その時は沙奈ちゃんも一緒よ！」

「ちょっと、何言つてるの？　沙奈を引き取る気？」

「当たり前でしょ。お姉ちゃんにあななことさせたのあなたたちな  
のよ？　そんな人たちと一緒にいるなんて沙奈ちゃんが可哀想よ。」

「……そうよ。あの女には確かにそう言つたわ。じゃあ言わせても  
らうけど、あんただつて優治のこと嫌つていたらしいじゃない。生  
き残つたのがお姉ちゃんで良かった。の人と一緒にいても幸せにな  
れないって」

「それは……」

「そんな人と一緒にいて沙奈は幸せかしら？　それに、あんたの姉を  
事実殺したのはあの子なのよ？　あんたと一緒にいるなんて息苦しい  
に決まつていいでしようよ。それならよっぽどこっちの家にいた方  
が幸せよ。あんたなんてどうせろくに収入もなく遊び歩いているん  
でしょ？！」

私は耐えきれず、割って入った。

「ねえ、なんなのこれ」

3人とも田を見開いて私を見た。

「おばあちゃんとおじいちゃんはお母さんのこと恨んでたんだ。私にとつては大事な家族だったんだよ」

「……そんなの、おばあちゃんだってわかつてるわよ」

「じゃあどうして、お母さんのこと苦しめたりしたの？私、幸せだつたのに。お父さんの交通事故は仕方のないことじゃない。誰が悪いわけでもないし、辛いのはみんな一緒にだつたんだよ。お母さんだつて辛かつたんだよ。殺したくて殺したんじゃないよー。」

私は声を張り上げた。大粒の涙が次々と溢れてきて、止まらなかつた。

「沙奈ちゃん……おばさんと一緒にに行こう~」

母の妹に差し出された手を私は振り落つた。

「行くわけないじゃん！馬鹿じゃないの！？あんたがお父さんのことそんな風に言つてるの、ずっと知つてたんだからー。お母さんにお父さんの悪口言つて、お母さんのこといつも困らせてたじゃない！お父さんが死んだときだつて、陰でこいつ笑つてたの知つてるんだからね」

彼女は振り払われた手を抑えて、私を見つめた。

「……私、もう死にたい。本当はあの日に死ぬはずだつたんだし。生きていたつて、辛いだけだよ。おじいちゃんとおばあちゃんととも一緒にいたくない。叔母さんとも一緒にいたくない。」

「沙奈、ちょっと待つて」

「何を待つていうの？おばあちゃんの言い訳を聞くこと、それともおばあちゃんとおじいちゃんが死んでいなくなるのを？」

「沙奈！」

おじいちゃんが私の肩を掴んだ。私は力いっぱい睨みつけた。

「誤解だよ、そんなことするわけないだろ！」

おじいちゃんの優しい声に、私はふっと息を吐いた。

「……違うの、ねじこちゃん。わい……わいだつてここのが

「じつだつてこいつ」

「……おじこちゃんを信用するとか、叔母さんを好きになるとか、  
そんなことぢやないのよ。何が嘘で何が本当のかなんて、じつでも  
よくなつちやつた。疲れたから、死ぬ。それだけ。わいぢやつわ  
ぢや言わないで。私が死ねば全部リセントされること、わい細つわ

「沙奈ー」

「沙奈ぢやんー」

私はおじこちゃんの腕を無理に離すと、家を飛び出した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1760ba/>

---

死ぬまでは

2012年1月5日18時55分発行